黙示録8章3－4節 「祈りという香しい煙」

1A 香壇からの煙
1B 聖徒たちの祈り
2B 祭司ザカリヤの祈り
2A 祈りを求められる方
1B 異邦人のような祈り
2B 私たちの間での働き
1C お独りでもできる方
2C 祈りによる参画
3A 祈りによって変わるもの
1B 変わらないみこころ
2B 変えられる私たちの心
1C 御霊による祈り
2C 心の開かれた祈り
3C あきらめない祈り

本文

黙示録 8 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 7 章まで来ましたが、今日、午後礼拝で 8 章を一節ずつ学びます。今朝は、3-4 節に注目します。「[3] また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。[4] 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。」

1A 香壇からの煙

1B 聖徒たちの祈り

これは、天における情景です。子羊イエスが、第七の封印を解かれました。そして七人の御使いが、ラッパをそれぞれ与えられました。それから、ここで読んだとおり、金の祭壇に香を献げました。すると、香の煙が立ちました。それが、「聖徒たちの祈りとともに」立っているとあります。私たちはすでに、5 章で、天の御座の周りにいた長老たちが、香に満ちた金の鉢を持っていて、「香は聖徒たちの祈りであった（8 節）」というところを、学びました。

地上にある幕屋は、天にあるものの模型であると、ヘブル書は教えています。祭司が聖所で、金の香壇で香を献げます。そしてその煙が、至聖所にある宥めの蓋を覆います。その煙というのが、天における聖徒の祈りを示しているということが分かります。

2B　祭司ザカリヤの祈り

今はアドベント、待降節ですが、祭司ザカリヤが神殿で香を焚く奉仕をしていたのを覚えていますか？主イエスがお生まれになる前に、バプテスマのヨハネが生まれます。この子を自分の妻エリサベツが産むことになるのを伝えるために、御使いガブリエルが、香壇の右に立っていました。その部分を読みます。ルカ 1 章 8 節から 13 節です。

> 8 さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、9 祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。10 彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた。11 すると、主の使いが彼に現れて、香の祭壇の右に立った。12 これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われた。13 御使いは彼に言った。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。」

ここにも、金の祭壇の香について、ザカリヤが、男の子が与えられるように、主に願っていたことが、聞き入れられたことを表していました。

2A　祈りを求められる方

このようにして、主が私たちに祈るように願っておられるのが分かるかと思います。ご自身の御座を示す、宥めの蓋のところで煙が覆うようにするということは、主ご自身の御座に、私たちの祈りが届いてほしいと願われているのです。

イザヤの預言の中に、エルサレムのことで、主を求めている者たちに、次のように命じている部分があります。「62:6b-7 思い起こしていただこうと主に求める者たちよ、休んではならない。主を休ませてはならない。主がエルサレムを堅く立て、この地の誉れとするまで。」主が、私たちの願い求めを聞かれるので、忙しくさせなさいということです。その願いを聞き入れることで、働かせなさいということです。そして主が約束された、エルサレムの回復をかなえるようにさせなさい、ということであります。ここまで、熱心に祈りなさいと命じておられるのです。

1B　異邦人のような祈り

主は、このように祈るよう命じておられますが、気をつけなければいけないのは、熱心に祈ることによって、なかなか耳を貸さない神に動いてもらうということではないことです。言葉数を多くして、それで神に影響を与えるということではありません。私が信仰を持ったばかりの時、キリスト者の学生会があって、その主事が「祈り倒す」という言葉を使っていました。正直、恐ろしささえ感じました。主を倒すなんて、なんと冒涜的なのか！と思ったものです。けれども、おそらく、親にしろ、上司にしろ、上にいる人に何度も懇願して、仕方がなしに、その願いを聞かないといけない状態にする、という意味でしょう。しかし、それにしても、主に対して祈るのが、そんなことではありません。

それは異教徒の祈りであると、イエスは言われました。「マタ 6:7-8 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。8 ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」私たちが、主に同じ言葉を、たくさん聞かせれば、それで主が聞いてくださる、と思ってはいけない、と言われています。

その後で、主は、こう祈りなさいと命じられましたね。その中に、「みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」とあります（マタイ 6:10）。主のみこころを変えることではなく、主のみこころが、この地上で行われるように願うのが、祈りです。

2B 私たちの間での働き

1C お独りでもできる方

主は、全能の神です。主にできないことはありません。そして、ご自分のみこころをことごとく行う、主権者であります。ですから、主は、人の助けを借りずとも、ご自分の事を成し遂げることができます。人に、主のなされることを信じ、関わってほしいと願われて、それで祈ってほしと願っています。

預言者エリシャの時代、イスラエルの都サマリアが、アラム軍に包囲されたことがありました。そこで、食糧が枯渇して、なんと母親が赤ん坊を食べてしまっていました。それで、王がエリシャに怒り、侍従を遣わしました。その側近にエリシャが言ったのです。「Ⅱ列王 7:1-2 エリシャは言った。「【主】のことばを聞きなさい。【主】はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』しかし、侍従で、王が頼みにしていた者が、神の人に答えて言った。「たとえ【主】が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」そこで、エリシャは言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」」明日、都の市場には、たくさん食糧が売られるようになるとエリシャが宣言しました。ところが、それを全く、侍従は信じませんでした。それで、エリシャは「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」と言ったのです。見るのですが、食べられないのです。

そして、町に四人のツァラアトの人、らい病人がいて、彼らが包囲しているアラム軍のところに行きました。すると、主は彼らが歩いている音を、大軍の音のようにアラム軍に聞かせたのです。それで彼らは慌てふためいて逃げます。それで、彼らは王に伝えます。それで、アラム軍の天幕に、大量の食糧がありました。それが次の日に、市場で売られました。町の門を、先ほどの侍従は門の管理をしていましたが、民が門で彼を踏みつけてしまったのです。それで、エリシャのことばのとおり、「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」となったのです。つまり、主はご自分の事を行われます。けれども、信じない者には、それに関わることができないということなのです。

祈りも同じで、主はご自分の計画を実現させていきますが、そのお働きに自分たちが関わることができなくなるということです。エステル記で、モルデカイがエステルに言った言葉も思い出してください。「エス 4:13-14 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたは、すべてのユダヤ人から離れて王宮にいるので助かるだろう、と考えてはいけない。もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」」これも同じです。エステルが関わらなくとも、主は他の人を起こして、ユダヤ人を救われる。しかし、自分は滅んでしまうということです。

イエス様は、とても興味深いことを、不正の裁判官の喩えで語っておられます。「ルカ 18:6-7 主は言われた。「不正な裁判官が言っていることを聞きなさい。まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」」主は、熱心な聖徒たちの訴えを聞いてくださって、ご自身が地上に戻ってこられる時に、正しい裁きを行ってくださいます。聖徒たちを迫害した悪、その他の不正に対して裁いてくださるのです。ところが、肝心の信仰が地上で見当たらないぞ、ということなのです。

主は、そのもどかしさを、イザヤの預言で語っておられました。「イザ 59:15-17 そこで真理は失われ、悪から遠ざかっている者も略奪される。【主】はこれを見て、公正がないことに心を痛められた。16 主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに?然とされた。それで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を支えとされた。17 主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。」主は、心を痛めて執り成す人がいてほしいと願われたのです。そうすることによって、主が真実な方で、確かに、世の不正や偽り、罪に対して報いる方であることを示したかったのです。けれども、だれもいないので驚かされ、ご自分の義で一方的に、イスラエルの残りの民を救われるということです。

2C 祈りによる参画

ですから、主は、ご自分の真実、恵み、義と救いを私たちにお示しになりたいと願われています。お独りですることができますが、そのみわざを私たちを通して行われたいと願うのです。その時に、私たちが願い求め、祈るということをする時に、そのみわざを私たちの間で成し遂げられます。主が、アサ王に対して預言者が語ったことばを思い出しましょう。「Ⅱ歴代 16:9a【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。」主の心と一つになっている人に、御力を現そうとされているのです。

そのような人に、ピネハスがいます。祭司ピネハスのしたことで、イスラエルの多くの人が死な

ずに済みました。イスラエルの宿営に、ミディアン人の娘たちがやってきて、男たちと忌まわしいことをしました。そして、大胆不敵に、彼らの前を男女が歩いています。そこでピネハスは槍を手に取り、天幕の奥で、二人の腹を刺しました。そこで、主が言われます。「民 25:11「祭司アロンの子エルアザルの子ピネハスは、イスラエルの子らに対するわたしの憤りを押しとどめた。彼がイスラエルの子らのただ中で、わたしのねたみを自分のねたみとしたからである。それでわたしは、わたしのねたみによって、イスラエルの子らを絶ち滅ぼすことはしなかった。」主の妬みを、自分の妬みとしました。すると、そこで主がイスラエルの子らを滅ぼすことをしませんでした。

3A　祈りによって変わるもの

1B　変わらないみこころ

主は、決して変わらない方です。マラキは、「主であるわたしは変わることがない。」と預言しました（3:6）。先ほどの、「祈り倒す」といった言葉にあるように、主のみこころを変えようとする試みが、いかに愚かであるかを思います。主は、私たちを造られた方で、善なる神です。私たちに最善を願われていて、そのみこころは最善なのです。私たちがそれを変えようとするのは、最善以下のことを求めることであり、愚かなのです。

私たちはその時は、最善とは到底思えないことが多くあります。けれども、主が恵みと少しずつ、私たちの信仰の歩みにしたがって明らかにされていく中で、私たちは、その時、最善のみこころであったと知ることができます。

2B　変えられる私たちの心

では、祈りで変えられるものは何でしょうか？それは、主ご自身の心と一つになるように、私たちの心が変えられていくことです。主は心がご自身のものと一つになる時に、御力を現されます。ですから、祈りによって、私たちはその心と一つになっていくように導かれます。

1C　御霊による祈り

御霊は、祈りを助け、導いてくださるお方です。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」このように、御霊が、私たちが言葉にならないうめきを持っても、祈っている中で執り成してくださいます。みこころにしたがって、執り成してくださいます。こうやって、私たちの思いが、神のみこころと一致していくのです。ですから、祈りには、聖霊の力が必要です。

2C　心の開かれた祈り

私たちの祈りは、とかく、自分の思いで歪められています。一つは、神は無限で全能のお方なの

に、私たちの有限を神に押し付けて祈ることが多いです。かぜを直すのと、がんを直すのは、神はどちらも、みこころであれば簡単にできます。けれども、かぜであれば、薬を飲めばよいとし、がんであれば、必死に祈ります。しかし、主にとっては、風邪も癌も、全能の力においては同じように、みこころにしたがって直すことができます。パウロは、祈りました。「エペ 1:19 また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」ゆえに、私たちに試されるのは信じることですね。信じて、忍耐して信じて、祈っていくのです。」

もう一つは、自分の思いを明らかにしないことです。祈る時に、お行儀が良いのです。言っている言葉はきれいなのです。誰かが大嫌いでも、「もっと主よ、愛すべき人をもっと深く愛せますように。」と祈ってしまいます。本当は、「この人の事、大っ嫌いです。見たくもありません。」と正直に告白し、それから、「主よ、こんな罪人をお赦しください。」と祈るのです。「詩 62:8 民よ どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。セラ」心を御前に注ぎ出します。

私たちは自分を欺くことが多いです。「神さまに、そんな酷い言葉を言うことはできない。」と、偽善ぶってしまいます。ならば、他の人に、その人のことについて憎々しいと、漏らしていることはありませんか？神には言えないが、人には言えると。これが大きな過ちです。ダビデの詩篇には、数多くの、呪いの祈りがあります。サウルやアブサロムのことを思って、敵を打ち破ってほしいと願っている祈りを献げています。しかし、彼はサウルを前にする時に、彼に仕返しをしないと誓っています。主が裁いてくださるように、とまで言っています。彼は、主に対して心を開いていたので、そこで主がすべての傷を知ってくださったことを知っているので、それで人に対しては、主の言われていることを行うことができたのです。

このようにして、自分自身の心が、主のみこころと調和していくようになり、それで主が、ご自身の御力を現されます。

3C あきらめない祈り

最後に、主が祈りにおいて願われているのは、あきらめない祈りです。このことについては、何度となく、イエス様が勧めておらえましたね。不正の裁判官の喩えで語っておられました。また、パンを貸してくれと、夜に友人に願ってきた人の喩えがあります。「ルカ 11:8-9 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」祈りましょう。あきらめずに祈りましょう。主は必ず、かなえてくださいます。